今年はベビーブーム　— ルシャ地区ヒグマ調査から　その４ —

出産ラッシュ

ルシャ地区は日本一クマが高密度に暮らしている地域といって良いでしょう。メスの成獣だけでも十数頭が確認されています。今年は、その内８頭のメスが17頭もの子グマを産みました。

一昨年、2012年は、ガリガリ君のやせたクマが、新聞紙上をにぎわせましたが、この年、カラフトマスの川への遡上が約１ヶ月も遅れて、飢餓状態におちいったクマがたくさんいました。子グマを連れたメスのほとんどは子を失い、翌2013年は単独になって発情し、交尾しました。その結果、今年はたくさんのメスが出産したと思われます。

子グマがみんな生き残るのはむずかしい

出産したメス８頭のうち、三つ子を産んだものが２頭。双子を産んだものが５頭、１頭しか産まなかったものが１頭でした。生まれた子グマたちが、みんな生き残って秋をむかえ、お母さんといっしょに冬眠に入ることができるわけではありません。三つ子の親子は、２組とも子が２頭に減りました。双子の親子は２組がそれぞれ１頭ずつ子を失っています。

今年もマスは不漁

７月後半から８月前半は、クマたちにとって最もきびしい時期です。春から初夏には子ジカや流れついたイルカの死体など、それなりに食べるものがありますが、カラフトマスが川に上がりはじめるまでの間は、１年で一番食物が乏しいのです。彼らは小さなアリや、海岸の石についた巻き貝、石の下のヨコエビなどを食べてしのぎます。

クマたちは、ギリギリの状態で耐え忍び、マスが上がるとむさぼり食って、一気に体重を回復させます。しかし、今年のマスの水揚げは、平成に入って最悪の不漁年であった2012年の６割ほどしかないほどの大不漁です。いつもの年なら、９月半ばには丸々と太るクマたちもまだスマートです。子グマの一部が死んだのも、マスの不漁が影響しているのかもしれません。

クマたちを救った山の実り

しかし今年は、ガリガリのクマはいません。子グマも全部死んだわけでもありません。９月初旬までマスが皆無であった2012年とちがい、不漁ながらもマスは細々と８月から遡上していました。また、クマたちを大きく救ったのは、山の木の実です。2012年は木の実も不作でしたが、今年は８月前半から、ハイマツやシウリザクラの実を食べることができたのです。

2016年以降は注意！

ルシャ地区に限らず、今年はあちこちで親子連れが多く見られます 。若いオスグマは、２～３才になると大きく移動・分散することが分かってきました。今年の子グマたちが移動をはじめる2016年以降は、これまで以上にゴミや食糧の管理をしっかりして、クマを人の居住圏に引き寄せない注意が必要です。

（山中 正実）

ルシャ地区でよく見られる 4組の親子を紹介します。

クマも十人十色。毛の色やツキノワの形、体型は、１頭１頭ちがっています。顔つきもちがうのが分かりますか？

性格ももちろんちがっていて、気の強いものもいれば、おっとりしたものもいます。昨年から、一部のクマにはGPSで位置を測定し、人工衛星経由でデータが送られてくるタイプの標識をつけて、細かい動きを調べています。

ワッキー親子（10歳以上）
額の黒っぽいつむじが特徴。ツキノワは幅広いエプロン状。今年は３頭の子供を連れていましたが、１頭はいなくなりました。

BE親子（15歳以上）
ルシャで最強のメス。ツキノワはない。鼻面が白っぽく、耳が大きい。３頭の子を連れていましたが、１頭はいなくなりました。

ハッチ親子（7歳）
気の強いお姉さん。ツキノワが首の後ろまで回っています。2回目の出産で、2頭の子を連れています。

ドラム親子（10歳以上）
右側が細長いツキノワが特徴。ドラムはBEの娘です。2頭の子を連れていましたが、1頭はいなくなりました。

※この調査は、ダイキン工業株式会社のご支援のもと、知床財団と知床博物館、北海道大学獣医学研究科との共同研究により行われています。現地調査は知床漁業生産組合の全面的な協力に支えられています。

発行　知床博物館協力会 2014.9.25
099-4113 北海道斜里郡斜里町本町49
斜里町立知床博物館内
TEL: 0152-23-1256　FAX: 0152-23-1257
http://www5.ocn.ne.jp/~museumsp/